

知的障害を伴う自閉症児の実態を踏まえた音楽の授業づくり（1）

発達段階が初期にある児童の楽器の活動における実態を捉える観点の検討に焦点を当てて

○工藤久美（筑波大学附属久里浜特別支援学校） 中川知香（筑波大学附属久里浜特別支援学校） 山本久美子（日本音楽療法学会認定音楽療法士）
KEY WORDS: 自閉症 実態把握 音楽の授業づくり

【目的】

平成 30 年に公示された特別支援学校学習指導要領解説各教科等編の音楽科では、発達段階が初期にある小学部 1 段階について、「A 表現」では、従前に引き続き「音楽遊び」の分野として示され、その内容は、「音や音楽を聴いて、自分なりに表そうとすること」「（児童が）表現する音や音楽に気付くこと」、そのための技能を身に付けることを通して音楽的な見方・考え方を育成することが重視されている。しかし、知的障害を伴う自閉症の小学部 1 段階の児童に対して「音や音楽を聴いて自分なりに表そうとすること」や「表現する音や音楽に気付くこと」をねらいとして音楽の授業を行うためには、知的障害を伴う自閉症児の実態を捉える観点をもつことが必要であると考え。なぜなら、知的障害を伴う自閉症児童が、音や音楽に気付くために活用している感覚が聴覚だけではないことや、興味・関心が限定されていること、対人的なやり取り等に困難を示している児童が多いからである。

本研究では、知的障害を伴う自閉症児童 1 名を対象に、楽器を介した教師とのやり取りの整理・分析を通して、小学部 1 段階の知的障害を伴う自閉症児の実態を捉える観点を明らかにすることを目的とする。発達の観点として、宇佐川浩氏の「感覚と運動の高次化理論」（2007）を参考にした。なお、本研究対象児の保護者より、研究発表の承諾を得ている。

【方法】

（対象児）知的障害を伴う自閉症の小学部 5 年生男児である。対象児の実態について以下の観点でまとめた。

項目	実態
日常生活	荷物を所定のところに出すなど、毎日繰り返す動作は進んで行うことができる。
音・音楽	静かに座っているときは、音を聴いて姿勢を変えるなど反応するが、走っているときは教師の言葉掛けに反応せず、音を聴いていない様子が見られる。
感覚	視覚 教師の手遊びや好きなキャラクター動画を見る。 触覚 水や自分の唾液を使って指を滑らせて遊ぶ。泥など手が汚れることは苦手である。 前庭・固有覚 突発的に走り出したり、壁や床を強くたたいたりする。
姿勢操作	椅子に座って話を聞く等できるが、手を膝に置いて体を支えたり、背中丸まったりしていることが多い。
対人	慣れ親しんだ人に対して手を引いたり、「おんぶして。」と声に出したりして要求を伝える。

（使用楽器）ラウンドベルの特徴は以下の通りである。

項目	特徴
感覚	触覚 ベルは鉄製で、皮膚で触れると固く、つるつるした触感があり、ひんやりとしている。 固有覚 回転するベルにはばちをかざし続けると、ベルーばちーばちを持つ手の順に振動が伝わる。 振動感覚 視覚 ベルは 8 色に色付けされ、円形に並んでいる。手で動かすとベルが回転する。 聴覚 回転するベルにはばちをかざすと、ドレミファソラシドと連続して音が鳴る。
操作	ベルを手で動かして回転させたり、止めたりする。回転しているベルにはばちをかざす、静止したベルをばちでたたく。

（時期・頻度）202x 年 9 月～12 月、週 1 回、3 分×10 回（授業計画）第 1～5 回は楽器を介した対象児と教師のやり取り、第 6～10 回は楽器と歌を介した活動を実施した。

（手続き）①楽器と教師の活動、楽器と歌と教師の活動のうち 3 種類のビデオと記録から、教師の働き掛け及び児童の反応を整理する。②整理した記録から、「感覚と運動の高次化理論」を参考に複数の関係者で意見交換を行い、知的障害を伴う自閉症児の実態を捉える観点について整理・分析する。

【結果】

1 ラウンドベルによる対象児の感覚受容と手の操作、姿勢楽器と教師との活動当初は、教師が楽器を差し出すと、ベルを見て左手に持ったばちで強くたたいた（固有覚）。また、右手でベルを回したり止めたりしてベルの回転する動きを見入っていた（視覚）。その様子から、ばちでベルをたたくと刺激が入るという因果関係やベルの回転の始点・終点に理解はあると思われた。次に、対象児に過敏が見られないことから、教師がばちを持つ左手に手を添えると、回転するベルにばちをかざし続けた（振動感覚、触覚）。ベルの回転が止まることで、刺激がなくなったことに気付き、再び右手でベルを回し続け、自ら始点作ようになった（終点の理解、始点の自発）。また、ばちを持った左手の肘を左の膝で支えた角度に当たる位置に教師が楽器を差し出すことで、姿勢が保持され、楽器を操作することができた。

2 ラウンドベルと歌による教師とのコミュニケーション
教師の 2 小節の歌い掛けの後に楽器を鳴らす活動では、対面の姿勢で「いっしょにならそうよ」（小柳玲子作詞・作曲）を使用した。教師が歌い掛けている間は体の動きを止め、歌が終わると教師を見るようになった。そして歌の後に楽器が差し出されると、ばちをベルにかざしたり、ばちでベルをたたいたりして鳴らした（終点の理解）。対象児のペースに合わせて即応的に活動を進められる選曲によって、教師と歌を介してやり取りできた。また、フレーズの終わりに楽器を鳴らす繰り返しは、記憶しやすく、予測しやすい。曲の終わりを理解した楽器と歌によるコミュニケーションにつながった。

【考察・今後の課題】

対象児の活動の結果から、楽器の活動を行うために必要な実態を捉える観点を以下 2 点から整理する。第一に、楽器の活動における実態を捉える観点は、①対象児の感覚受容の実態（振動感覚、触覚、固有覚、聴覚、視覚）、②手の操作性、姿勢保持の実態（座位姿勢の保持や肘の補助による手の操作の自発、教師の身体的援助の受け入れの有無）とした。③①と②の実態を捉えた上で対象児に合った楽器の特徴の整理は次のとおりとした。A 視覚的特徴：色、形、材質等、B 操作の特徴：触れる、打つ、つかむ、止める、かざす等、C.音色の特徴：音の大きさや持続性、対象児の受け入れやすさ、操作による音色の変化等が結果から見出された。第二に、楽器と歌を使った活動における実態を捉える観点は、①～③に加え、④教師の歌い掛けに対する反応（A 歌い始めの反応、B 歌っている間の行動）、⑤教師の歌い掛けの後の反応（A 教師を見る、B 差し出された楽器操作の自発の有無）とした。⑥対象児に合った歌の選曲は次のとおりとした。A 活動が持続する曲の長さ：曲の始点・終点の理解、B 対象児のペースへの即応性、C 同型反復の構造：記憶や予測が結果から見出された。発達が初期の段階にある知的障害を伴う自閉症児が、「音や音楽を聴いて自分なりに表そうとすること」力を育てるためには、教師が上述した観点で子供の実態を捉えることが必要だと考える。本研究は一事例の考察であったが、引き続き実際の子供の事例から考察を深め、知的障害を伴う自閉症児の音楽科 1 段階の指導内容の整理を行うことが今後の課題である。

（KUDO Kumi, NAKAGAWA Chika, YAMAMOTO Kumiko）